

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヨゼフィーネとは誰か : カフカ『歌姫ヨゼフィーネ』におけるネズミ族との関係
Author(s)	古川, 昌文
Citation	表現技術研究 , 18 : 1 - 10
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53866
URL	https://doi.org/10.15027/53866
Right	
Relation	



ヨゼフィーネとは誰か

—カフカ『歌姫ヨゼフィーネ』におけるネズミ族との関係—

古川 昌文

はじめに

カフカの作品の多くは自分自身を描くオートフィクションの性格をもつ。カフカの死後
に出版された短編集『断食芸人—4つの物語』(*Ein Hungerkünstler — Vier Geschichten*)はカ
フカ晩年の自らの文学に対するアンビヴァレントな視線を感じ取ることができるが、とり
わけ短編集の最後に置かれた『歌姫ヨゼフィーネあるいはネズミ族』¹(以下、『ヨゼフィー
ネ』と表記する)はその傾向が強く、物語を動かすのは出来事の連鎖ではなく、肯定と否定
とを行き来する語りそのものである。本稿ではこの『歌姫ヨゼフィーネ』に焦点を当てて、
死を前にしたカフカが自己およびその文学をどのように見ていたのかを探っていく。

1. オートフィクションとしての『ヨゼフィーネ』

『ヨゼフィーネ』は1924年3月から4月にかけて書かれたカフカ最後の作品である。こ
れを執筆した頃、カフカの病(結核)は末期にあり、執筆の約2か月後、この世を去る。咽
頭結核により喉を侵され声を失いかけていたカフカが「歌姫」を主人公としたのは皮肉であ
る。ヨゼフィーネ(Josefine)という名が作家自身と密接に関係していることは次の点から
明らかである。ヨゼフィーネはヨーゼフ(Josef)の女性名であり、このヨーゼフという名は
オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフI世(Franz Joseph I, 1830-1916)の名を介してカフカ
の名「フランツ」(Franz)と結びつく。長編『訴訟(=審判)』(*Der Prozess*)の主人公の名
はヨーゼフ・K(Josef K.)であった。名前の関連性をもって主人公をそのまま作家と同一視
することはむろんできないが、カフカがヨゼフィーネという主人公名に自分の名を重ねて
刻印していることは確かであろう。

この短編が収められた短編集『断食芸人—4つの物語』のうち、表題作『断食芸人』は断
食芸人(Hungerkünstler)を、『最初の悩み』(*Erstes Leid*)はブランコ曲芸師(Trapezkünstler)
を主人公とすることによって芸/芸術(Kunst)を前景化している。『ヨゼフィーネ』を含め、
結核に侵されていた晩年に書かれたこれらの作品に共通するのは自分の芸(芸術)を見つめ
るカフカの肯定と否定がないまぜになったイローニッシュな視線である。『断食芸人』では
断食芸において卓越した能力を持つにもかかわらず観衆から見放され、断食したまま飢え
死にする芸人の姿が描かれた。『ヨゼフィーネ』はこれと大きく異なる点が二つある。一つ

¹ 以下のテキストを用い、引用する際は頁数のみを引用末尾に記すこととする。

Franz Kafka: „Josefine, die Sangerin oder Das Volk der Mause“ In: ders., *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, S. Fischer, 1994.

は、断食芸人が孤独な芸人であるのに対して、歌手であるヨゼフィーネはネズミ族 (das Volk der Mäuse) という共同体の一員であること。もう一つは、観客を失っていく断食芸人に対して、ヨゼフィーネが歌い始めると必ずネズミたちが馳せ参じてその歌声に聞き入るという点である。ネズミという動物が主人公であるため、『断食芸人』より寓意性が強く感じられ、現実性は薄められている。また、主人公をネズミ族という共同体の中に置いて第三者的視点からユーモアを交えて描いたことにより、カフカ作品によくみられる閉塞感は弱められているといえる。² 語り手はネズミ族の一員という設定で、ヨゼフィーネとその歌、さらにネズミ族との関係を語っていく。冒頭に書いたように、継起する出来事を語っていくのではなく、語り手によるヨゼフィーネとネズミ族の観察記録という性格をもつ。

本稿は作品を一種のオートフィクションとみなし、カフカの自らの文学行為に対するアンビヴァレントな評価と姿勢を読み取っていく。その際重要なのは主人公と他のネズミたちとの「関係」である。本稿のタイトル「ヨゼフィーネとは誰か」はネズミ族という共同体との関係によって規定されるからである。その意味で「ヨゼフィーネとは誰か」は「ネズミ族とは何者か」という問いと等価である。

2. ヨゼフィーネの歌とカフカの創作

語り手は物語を次のように開始する。

われらが歌姫の名はヨゼフィーネである。聞いたことがない者には、その歌の力が分からない。彼女の歌に魅了されない者はいないのだ。(350)

皆を魅了するヨゼフィーネは「唯一的存在であり、彼女が亡くなれば我々の生活から音楽は消えてしまうだろう」(350)と語り手はこの歌姫を最高度に持ち上げる。一方で「聞いたことがない者には、その歌の力が分からない」という一文は、彼女の歌の魅力の説明するのが難しいことを暗示している。案の定、彼女の音楽の何が自分たちを惹きつけるのかと考え始めたたん、語り手は疑念を記し始める。

いったいあれは本当に歌なのだろうか。我々は非音楽的であるけれども、歌の伝統を持っている。[中略] ゆえに我々は漠然とではあるが歌が何であるかを知っている。そして本当のところヨゼフィーネの芸術は我々が漠然と知っているものと合致しないのである。そもそもあれは歌なのか？ひょっとしてネズミがちゅうちゅう鳴いているだけなのではないか？(351)

こうして冒頭で絶賛されたヨゼフィーネの歌はたちまち大きな疑問符が付けられる。ネズ

² 次のハンドブックにはこの物語の雰囲気をも H. Polizer は „heiter“, Joseph P. Sternf は „serene“ と評したことなどが紹介されている。Vgl. Manfred Engel/Bernd Auerochs (Hrsg.): *Kafka Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. J.B.Metzler, 2010, S. 323f.

ミ族の中には彼女の歌声の芸術性を疑う者たちがおり、語り手もそうした懐疑派に属する。語り手の耳にはヨゼフィーネの歌声をネズミ族なら誰でもしているちゅうちゅう鳴き（Pfeifen）から区別することができない。そこで語り手は、皆がヨゼフィーネの歌に魅了される原因は歌そのものではなく歌う姿を見ることにあるのではないかと考える。彼女の歌の力は身振り手振りを含めた自信たっぷりのパフォーマンスを目の当たりにすることによって生まれるのではないかと。また、ヨゼフィーネの歌をクルミ割りにたとえて説明を試みる。クルミ割りは芸術ではないが、あえて皆を集めて仰々しくやってみせられると、ふだん自分たちが難なくやっている行為に潜む芸術性に気づかされる、ということもありうるのではないか、もしかするとちょっと下手なくらいの方が効果的ではないか、と。もちろんこのような語り手の考察はヨゼフィーネの歌そのものの価値を下げることに他ならない。もし語り手の言う通りであるならば、遠からずヨゼフィーネの歌がただのネズミのちゅうちゅう鳴きにすぎないことが明らかになって、観客は離れていくだろう。しかし実際はそうではなく、彼女が歌い始めると必ずネズミたちが集まってきてじっと聞き入るのだ。

語り手の耳にはただのちゅうちゅう鳴きにしか聞こえない歌がなぜ一族の者たちをこんなにも惹きつけるのか。語り手はヨゼフィーネの歌について様々な面から考察しその秘密に迫ろうとするが、はっきりした答えは得られない。ある対象を描きながら対象の姿が揺れ動いて未決定な状態に置かれるのはカフカ文学の特徴の一つである。³この特徴はカフカ初期の作品からこの『ヨゼフィーネ』まで貫かれている。ヨゼフィーネの歌がどのようなものなのか、最後まではっきりしたことは分からない。そしてそのようなヨゼフィーネの歌がカフカの文学の寓意であるとするならば、カフカは自分の文学の価値を最後まで疑っていたことになる。カフカは自分の「書く」ことや書いたものを「いたずら書き」（Kritzeln, Gekritzeln）と呼んでいた。⁴プロート宛ての手紙にもカフカはこの言葉を使っている。⁵もちろん自分の文学に対するこうした卑下とも韜晦とも取れる言葉は、高い評価を欲していることの裏返しでもある。求めるものが高いところがあればあるほど、現実に対する失望も大きくなるからだ。『ヨゼフィーネ』にはこの落差が、ヨゼフィーネの求める限りなく高い評価と周囲のネズミたちの無理解との落差として表現されている。というのも、ネズミ族は彼女の歌をじっと聞いているのに、彼女によれば「耳の聞こえない者を前に」（vor tauben Ohren）歌っているようなものだし、拍手喝采を受けはするが「本当の理解」（wirkliches Verständnis）はしてくれていない（355）。つまり彼女の自分の歌に対する自己評価は頗る高く、彼女が求め

³ カフカの執筆活動初期に書かれた『木々』（*Die Bäume*）と題された次の作品はそうしたカフカ的特徴をよく表している。「というのも私たちは雪の中の木の幹のようなものなのだから。それは滑らかに雪の上に乗っているように見える。ひと突きすれば押しつけることもできそうだ。いや、そうはいかない。木は大地としっかり結びついているのだから。ところがほら、それすらもそうみえるだけなのだ。」（33）

⁴ Vgl. Friedrich Schmidt: „weit vor dem Ende abgebrochen [...]“ Kafkas fragmentarisches Schreiben. In: *literatur für leser* 27 (2004), Heft 4, S. 190.

⁵ 『ヨゼフィーネ』が書かれた1924年1月半ば（日付未記入）のマックス・プロート宛の手紙を参照。

るものは手の届かない高みにある。

彼女が最高の冠を求めるのは、それが今手の届きそうな高さにあるからではなく、それが最高の冠だからである。できることならば彼女はその冠をさらに高いところに掲げるであろう。(372)

このような芸術に対する高い要求はカフカが求め、自分に課していたものでもある。そのため実際に書いたものに対して満足することができず、その多くを破棄してしまったのであろう。

以上のような読み方をしたときに見えてくるのは、ヨゼフィーネはカフカの「書く」自己ではないかという、ある意味ありきたりの解釈である。それは『断食芸人』の断食芸がそんなのと同じである。但し、『ヨゼフィーネ』にはネズミ族という共同体があってヨゼフィーネを支えている（ヨゼフィーネに言わせれば自分がネズミ族を庇護しているのだが）。断食芸人にはそのような存在は無く、単独で世界と対峙しなければならない。このような違いを考慮に入れると、ヨゼフィーネの方が「書く」自己の範囲が狭く限定されているとみることができるだろう。あるいは極端にデフォルメされてはいるもののカフカの「書く」自己により近いともいえそうだ。というのも、カフカは「書く」ことによって生活していたわけではないと同様に、ヨゼフィーネもまた歌うことによって生活の資を得ているわけではないからである。いわゆるサラリーマン作家だったカフカは、昼は半官半民の労働者災害保険局で働き、夜に執筆するという生活を送っていた（晩年は結核の悪化のため職を辞して年金生活に入っていたが）。いくつかの作品が文芸誌に掲載されたり単行本として出版されたりしたが、作家として独り立ちするには程遠く、仕事を辞めて執筆（芸術）に専念することは到底不可能だった。カフカには執筆に専念したいという気持ちと仕事を辞めるわけにはいかないという気持ちが同居し葛藤していた。この葛藤は労働の免除を求めるヨゼフィーネとそれを許さないネズミ族との関係においてはっきりと表現されている。

もうずっと前から、もしかすると彼女の芸術家人生の最初から、ヨゼフィーネは彼女の歌のためにあらゆる労働を免除してもらうために戦ってきた。つまり、日々のパンの心配や、その他我々の生存の戦いと結びついている一切を彼女から除去して、それを一おそらく一民衆全体に転嫁するべきだというのだ。(368f.)

だがネズミ族は彼女の要求を容れることはない。

ネズミ族は彼女の主張に耳を傾けはするが、聞き流す。この容易に感動する民衆(Volk)は、しばしば頑として感動しないのである。この拒絶は時にきわめて冷厳に行われるため、ヨゼフィーネですらたじろいでしまうほどだ。(369)

労働からの解放を求めるヨゼフィーネとそれを許さないネズミ族。このネズミ族という共同体は何者なのか。ヨゼフィーネの歌はカフカの「書く」自己であると述べたが、ここまでは、細かい違いはあっても、ほとんどの論者が一致するところだ。解釈が分かれるのはネズミ族である。ヨゼフィーネの歌に聞き入り、しかしその歌の価値には疑問符を付け、彼女の労働の免除要求はきっぱり撥ね退ける存在。この不思議な集団はいったい何の寓意なのか。ネズミ族には民族 (Volk) という語があてられており、次節で述べるようにユダヤ民族と解釈しうる特徴が少なからずあるため、何よりもユダヤ民族との関連性を考えてみたくなる。次節ではこの点を少し検討してみよう。

3. ネズミ族とユダヤ民族

『ヨゼフィーネ』に登場するネズミ族とは何を表しているのか。ここをどう考えるかによって、ヨゼフィーネの「書く」自己という規定も位相を変えていくだろう。以下ではネズミ族をユダヤ民族とみなす見方を中心に検討する。

マックス・ブロートが本作をユードントゥームやシオニズムと結びつける解釈を行って以来、⁶ネズミ族をユダヤ民族の比喩とみなす研究は多い。⁷カフカがユダヤ人であったこともその理由ではあるが、加えて二つの大きな理由があると思われる。一つは、『ヨゼフィーネ』に描かれたネズミ族の在り方である。「敵意に満ちた世界の騒乱の中にいる私たち一族のみじめな存在 (die armselige Existenz unseres Volkes mitten im Tumult der feindlichen Welt)」

(362)、「我々が散らばって暮らさねばならない土地はあまりに広大であり、我々の敵はあまりに多く、至る所で我々を待ち構えている危険はあまりに予測しがたい (die Gebiete, auf denen wir [...] zerstreut leben müssen, sind zu groß, unserer Feinde sind zu viele, die uns überall bereiteten Gefahren zu unberechenbar)」(363) といった記述をみれば、誰しもユダヤ人が受けてきた迫害やディアスポラ状況が頭をよぎるだろうし、それがユダヤ人作家の文章であればなおさらである。

一方で「一般に我々は歴史研究をすっかりおろそかにしている (im allgemeinen vernachlässigen wir Geschichtsforschung gänzlich)」(360f.) という、ユダヤ民族を指すとは思えない記述もあってネズミ族＝ユダヤ民族説の攪乱要因となってきた。そのためか、ネズミ族をユダヤ民族一般を表すものとする解釈は作品受容の初期にほぼ限られ、ユダヤ民族の範囲を限定しようとする見方が優勢になってきた。その代表格がマーク・アンダーソンの解釈であろう。

アンダーソンは『ヨゼフィーネ』の中に 19 世紀から 20 世紀にかけての、つまりカフカと同時代のユダヤ人に関する言説が多く取り入れられていることを指摘し、ネズミ族を時代的に限定された、カフカ自身もそこに属すると感じていた「西欧ユダヤ人」ではないかと推測する。アンダーソンによれば、ユダヤ人には真の音楽的才能が欠けているとするリヒャル

⁶ マックス・ブロート (辻理他訳) 『フランツ・カフカ』みすず書房 1972、305 頁以下参照 (原著は Max Brod: *Franz Kafka. Eine Biographie*. S. Fischer 1954)。

⁷ Manfred Engel/Bernd Auerochs (Hrsg.): *Kafka Handbuch*. a.a.O., S. 325f.

ト・ヴァーグナーやオットー・ヴァイニングの説など、音楽に関する当時の様々な反ユダヤ言説がネズミ族の「非音楽性」(Unnmusikalität) (351) などとして作中に取り入れられている。⁸ 数ある動物の中でネズミが選ばれたのは、反ユダヤ言説の中ではユダヤ人がしばしばネズミなどの害獣や害虫に喩えられたからであり、またイディッシュ訛りのドイツ語を軽蔑的に指す *mauscheln* はドイツ語のネズミ *Maus* を連想させる。⁹ 「歴史研究をおろそかにしている」という、ユダヤ民族にあてはまるとは思われない作中の記述も、ディアスポラの宿命を背負うユダヤ人は歴史的伝統から断ち切られているという世紀転換期に盛んに行われた議論と関係づけられる。¹⁰ カフカの浩瀚な伝記を書いたアルトはこうした見方を踏襲しつつ、共同体が壊れていくとともに共同体との繋がりや存在意義を失っていく芸術家という、より一般化された問題を『ヨゼフィーネ』に読み取ろうとする。¹¹

『ヨゼフィーネ』の中にユダヤ民族を想起させる記述がなされているだけではなく、同時代の反ユダヤ言説がふんだんに取り入れられているというアンダーソンの指摘は非常に重要であり、作品と社会との新たな関係を明るみに出している。だがそれにもかかわらず、『ヨゼフィーネ』の核を成す部分には触れていないのではないか。というのも、作中のヨゼフィーネとネズミたちの関係はそうした同時代的言説とは無関係なところにあるように思われるからである。たとえば、前節でも述べたように、ヨゼフィーネが労働の免除を要求したときに他のネズミたちはきっぱり拒否するのだが、これはカフカと同時代の西欧ユダヤ人との関係からは説明することのできない事態であろう。あるいはヨゼフィーネが歌い始めると、ネズミたちは遠くからでも駆けつけて来て歌声に聞き入るのだが、これもカフカと同時代の西欧ユダヤ人という概念を使って説明するのは困難だ。ではネズミ族とは何者なのか。次のように問い直してみよう。あたかもユダヤ民族の寓意であるかのごとくに描かれたネズミ族とは何者なのか。

4. ネズミ族とは何者か

『ヨゼフィーネ』の語りはかなり錯綜していて、ヨゼフィーネの歌ひとつ取ってみても明確な像を結ばないが、物語の核となるヨゼフィーネとネズミ族との関係に絞って、できるだけ単純に考えてみたい。すでに見た通り、ヨゼフィーネは自分の歌に自信を持ち、理解と高い評価を求めているのに対し、ネズミ族の方は全員ではないにせよヨゼフィーネの歌の芸術性に疑問を抱いている。ところがそれにもかかわらずヨゼフィーネが歌うとなるとネズミたちは駆けつける。危機にある時ほど、ネズミたちはヨゼフィーネの歌を欲し、ヨゼフィーネもまた危機の局面になると、時が来たときばかりに歌うのである。はっきりしているのは、ヨゼフィーネ以外のネズミたちは「聞く」立場だということ、そして単に聞くのではなく「魅

⁸ Mark M. Anderson: *Kafka's Clothes. Ornament and Aestheticism in the Habsburg Fin de Siècle*. Clarendon Press-Oxford 1992, pp. 196ff.

⁹ *Ibid.*, p. 205.

¹⁰ *Ibid.*, p. 213f.

¹¹ Peter-André Alt: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. C.H. Beck 2005, S. 663f.

了される」ということである。そのくせ、歌を聞く現場から離れると互いに「歌としちゃ特にすごいわけわけでもないな (als Gesang nichts Außerordentliches)」(351) などと言い合うのである。先にヨゼフィーネの歌はカフカの「書く」自己であると述べた。そうであるとする、ネズミ族は「読む」役割を果たしている。カフカが書くときにいつもやって来て、それを読む者とは誰だろう。それはカフカの書記を同時に読むもう一人のカフカではないだろうか。

ほとんどいつも動いていて、しばしばあまりはっきりしない目的のためにあちこち駆け回っているわが民族の者たちを自分の周りに集合させるためには、たいていの場合、ヨゼフィーネは顔を反らせ、口を半分開け、眼を上に向け、これから歌うぞという、あのポーズをとりさえすればいい。[...] 彼女が歌うつもりだという情報はすぐに広がって、皆は列をなして駆けつけるのだ。(356f.)

ネズミたちはヨゼフィーネが歌う姿勢をとると集まってきて歌を傾聴する。これは、夜、カフカが「書く」体勢をとったとき、労働や生活に向けられていたカフカの神経が次第に静まり、書かれていく文字へと集中していく様を表しているのではないか。歌うときには必ず集まって来るというヨゼフィーネとネズミたちとの関係はそのように考えた方がすっきり理解できるように思われる。

では前節で紹介した、反ユダヤ的言説がそこかしこに見出されることはどう考えるべきか。言い換えると、カフカはなぜネズミ族にネガティブな性格付けを行ったのか。歌手であるヨゼフィーネが主人公であるのに、ネズミ族は非音楽的であるとされ、明らかにヴァーグナーやヴァイニングアの反ユダヤ言説が取り入れられている。とりわけヴァイニングアは反ユダヤと女性差別に満ち満ちた著書『性と性格』(*Geschlecht und Charakter*)の中で「ユダヤ人は歌わない」(*der Jude singt nicht*)¹²と書き、ユダヤ人の非音楽性について自論を展開した。ヴァイニングアによればヴァイニングア自身ユダヤ人であるがユダヤ人は劣等民族であり、女性は劣等性である。カフカはあえてこうした差別的言説を利用するように、主人公を「女性」かつ「歌手」とした。その理由はおそらく、カフカの強い自己否定に帰することができよう。カフカは父親に宛てた手紙の中で繰り返し罪責感 (*Schuldbewußtsein*) や自分は無価値であるという感情 (*Gefühl der Nichtigkeit*) に襲われることを語っている。¹³ また、カフカは自らを「非音楽的」と言い、ブラームス・コンサートに行った時のことを次のように書いている。「僕は音楽をひと連なりのまとまりとして楽しむことができない。とき

¹² Otto Weininger: *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung*. Wilhelm Braumüller 1908¹⁰, S. 443.

¹³ カフカが父に宛てて 1919 年に書いた長い手紙だが、父の手に渡ることはなかった。こうしたネガティブな感情は父との関係の中で生じたというのがカフカの言い分である。Vgl. Franz Kafka: „Brief an den Vater“ In: ders., *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, Hrsg. von Jost Schillemeit, S. Fischer 1991, S. 143-217.

たま、ある感銘が僕の中に生じるが、それが音楽的な感銘であることはめったにない」¹⁴

つまり、カフカが「書く」ことよって自己を表現しようとしたとき、そのために好適な表現が反ユダヤ的言説の中にあることを見出し、それを存分に利用した結果『ヨゼフィーネ』という作品が出来上がった、ということではないだろうか。おそらくカフカは同時代のユダヤ人や女性に向けられたネガティブな言説を、それが向けられた対象から切り離して、自己を卑下するための表現として利用したのである。

ネズミ族とは何者かという問いに戻ろう。以上のことから、ネズミ族はカフカの「読む」自己であり、「労働する」自己であり、かつユダヤ人に向けられるあらゆる否定性をまとった存在であるといえる。そして夜、「書く」自己が書くことを始めると、生活のための活動を止め、「書く」ことを見守る。そこには自己の真実が刻まれていくはずだからだ。しかし「書く」時間が終われば、書かれたものは大したものではないように感じられる。あの程度なら、昼間、仕事の合間にでも書けるではないか、と。そうして常に「書く」自己に寄り添いながら、同時に批判的な眼差しを向けている、「生活する」自己こそがネズミ族なのではないか。

5. ヨゼフィーネとは誰かーネズミ族との関係において

ヨゼフィーネの歌を聞くためにいつも万難を排して集まってくるネズミたちについて語り手は「なぜ皆はヨゼフィーネのためにこんなに尽くすのか」(357)と疑問を呈する。「民衆は自分に向かって小さな手を差し伸べる子供を受け入れる父親のようなやり方でヨゼフィーネの世話をしている」(359)。ここで「父親のようなやり方で」(in der Art eines Vaters)ヨゼフィーネを支えるネズミ族とは、カフカの「書く」自己を支えるために労働に勤しむもう一人のカフカ、「生活する」自己である。後者は前者を父親のように支えているのだが、ヨゼフィーネの考えでは逆である。

ヨゼフィーネは民衆とは反対の意見である。自分の方こそ民衆を庇護しているのだ、と彼女は信じているのだ。政治的もしくは経済的苦境から我々を救っているのは彼女の歌だ、[...] そしてその歌はたとえ不幸を駆逐できないとしても、少なくとも不幸に耐える力を我々に与えているのだ、というのが彼女の言い分である。(359f.)

ヨゼフィーネとネズミたちの言い分は真っ向対立しているようにみえるが、二者択一と考える必要はあるまい。「生活する」自己であるネズミ族は「書く」自己であるヨゼフィーネを労働によって支え、「書く」自己であるヨゼフィーネは渾身の歌のパフォーマンスによって「生活」する自己を支えている。言い換えると、ネズミ族はヨゼフィーネを身体的に、ヨゼフィーネはネズミ族を精神的に支えているのである。ヨゼフィーネのパフォーマンスは

¹⁴ 1911年12月13日の日記。Franz Kafka: *Tagebücher*. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Paslez, Fischer Taschenbuch 2002, S. 291.

次のように描写される。

するともう彼女はまそこに立っている。あの華奢な姿で。とりわけ胸の下を、見る者を不安にさせるほどに震わせて。まるで持てる力のありったけを歌に注ぎ込んだように。まるで歌の役に立たないものすべてから生きる可能性がほとんど全部抜き取られてしまったかのように。まるで何もかも奪われ、棄てられ、ただ良き精霊たちの保護に委ねられたかのように。まるで自分自身をすっかり空っぽにされ、ただ歌の中に住んでいて、掠め過ぎる冷たい風のほんのひと吹きで彼女を殺してしまえるかのように。(356)

鬼気迫る渾身のパフォーマンスだが、読みようによってはどこか滑稽でもある。そうした両義性を常に孕みながら、ヨゼフィーネは全身を使って歌い、最高の評価を求め続ける。その両義性はカフカの「書く」自己と「生活する」自己という二面性から生じているだろう。

物語はある日突然ヨゼフィーネが姿を消すことによって終わる。カフカは主人公の死で終わる物語を多く書いた。それはカフカが自己を疑似的に殺すことによって逆説的に生きるためであっただろう。しかしヨゼフィーネは単に姿を消す。語りが一瞬乱れる。

奇妙だ、なんという計算違いをしているのだ、あの賢い娘が、ひどい計算違いだ、これではまるでもともと計算などしておらず、ただ自分の運命に流されているだけのようではないか。(376)

ほとんど声を失っていたカフカにとって、自らの「書く」自己であるヨゼフィーネの声が消えることは必然だったに違いない。ヨゼフィーネの姿が消えてまもなく、ネズミ族の物語は終わり、カフカの姿も消える。

この作品は最初「歌姫ヨゼフィーネ」(Josefine, die Sängerin) というタイトルでプラハ新聞に掲載された。後でカフカはこれに「あるいはネズミ族」(oder Das Volk der Mäuse) を付け加えた。この「あるいは」(oder) は二者択一ではなく言い換えの用法と取るべきだろう。ヨゼフィーネもネズミ族も現れ方が異なるだけで同一の人物なのである。

(ふるかわ まさふみ、広島大学大学院人間社会科学研究科助教)

Wer ist Josefine?

Über die Beziehung zwischen der Protagonistin und dem „Volk der Mäuse“ in Kafkas *Josefine*-Erzählung

Masafumi FURUKAWA

Key Words: Franz Kafka, Josefine, Antisemitismus, Musik, Kunst

Die vorliegende Abhandlung befasst sich mit der Beziehung zwischen der Protagonistin Josefine und dem Mäusevolk in Kafkas *Josefine, die Sängerin oder das Volk der Mäuse* (1924).

Die traditionelle Forschung hat das Mäusevolk oft mit dem jüdischen Volk in Verbindung gebracht. Das liegt zum einen daran, dass es in der Erzählung mehrere Ausdrücke gibt, die auf die Situation des jüdischen Volkes anspielen, und zum anderen daran, dass viele antisemitische Diskurse aus Kafkas Zeit enthalten sind.

In dieser Arbeit geht es jedoch nicht darum, das Volk mit den realen Juden in Beziehung zu setzen, sondern zu argumentieren, dass es den Menschen Kafka mit seinen Lebensbedürfnissen darstellt, der den „schreibenden“ Kafka physisch unterstützt, während umgekehrt dieser jenen geistig unterstützt.

Die in der Erzählung enthaltenen antisemitische Diskurse sind darauf zurückzuführen, dass Kafka, der ein starkes Schuldbewusstsein und eine Tendenz zur Selbsterniedrigung hatte, dies zu einer Art Selbstdarstellung nutzte. Der Grund für Kafkas Entscheidung für eine weibliche Protagonistin dürfte auch in der Rezeption antisemitischer und misogyner Diskurse Otto Weiningers liegen. Anstatt sich gegen diese diskriminierenden Diskurse aufzulehnen, nutzte Kafka sie umgekehrt, um sich selbst auszudrücken.

Josefine fordert Verständnis und Bewunderung für ihre Kunst, aber der Erzähler, ein Mitglied des Mäusevolks, zweifelt an ihrer Kunstfertigkeit: „Ist das überhaupt Gesang?“ Hier kommen sowohl Kafkas hohe Ansprüche als auch starke Zweifel an seiner eigenen Literatur auf ambivalente Weise zum Ausdruck. Die Beziehung zwischen dem Volk der Mäuse und der Sängerin ist keine Beziehung zwischen einer Gemeinschaft und einem Individuum, vielmehr kommen hier zwei verschiedene Aspekte eines einzigen Subjekts zum Ausdruck.